



英語学習の *Doing, Feeling, Thinking* (3)

竹内 理 Takeuchi Osamu
(関西大学)

これまで本連載では、自己調整学習 (Self-regulated Learning: SRL) の枠組みの中で、(1) 学習行動や学習方略と関係する *Doing* の領域、および、(2) 学習者の情意に関わる *Feeling* の領域について、学習場面と関係づけながら議論してきた。最終回となる本稿では、目標設定や学習計画、さらには振り返り・修正に関わる *Thinking* (つまりメタ認知) の分野について議論してみたい。

1 目標を持つ

英語学習成功者の研究を概観すると、共通して見られる特徴の1つとして、具体的な目標を持って学習を進めている、ということがあげられる。彼らの目標の多くは自ら設定したものであり、たとえそれが他者から与えられた場合でも、その意義を納得し、これを内化して取り組んでいる傾向が高い (Miura, 2011; 竹内, 2007; Takeuchi, 2009)。

成功者の目標設定は、時間軸で分けると大きく3つに分類できるようで、まず短期目標の場合は、身近で具体的なものが中心を占め、少しの努力で比較的容易に達成される傾向の目標が多い。一方、中期目標の場合は、短期目標の達成をいくつか積み上げていくことで実現していけるものが多く、達成感を味わえるような内容が中心となっている。これに加えて、学習成功者は長期目標も持ちあわせており、これらはビジョンという形で、成功の具体的かつ明確なイメージとして、彼らの中に存在しているようである。

では、我々が直面している中学校の教室場面では、生徒たちは英語学習に関する明確な目標を持っているのであろうか。また持っているとする、それらは自己決定的なものであろうか。残念ながら、多くの学習者は明確な目標を持ちあわせておらず、自己

決定的な目標を持つ学習者に至っては、ごく少数と云わざるを得ない。筆者は、ここに教師の果たすべき役割があると信じている。なるほど、個々の生徒に合った目標を設定するのは至難の業であろう。また中学校の段階の学習者に、長期的目標を持たせるのも不可能に近いかもしれない。しかし、目標がなければ学習は継続的に進まない。せめて子どもたちと一緒に、達成可能な当面の目標を設定していくこと、そして、生徒たちが「なんで英語なんか勉強しないとイケないの」と、正面を切って (ビジョンを) 問うてきた時、これに対して、彼らが納得するような答えを用意しておくことが、我々教師に求められているのであろう。

2 計画を立てる

目標が定まれば、次にその達成に向けた学習計画を立てることになる。この際に重要なのは、チャレンジという要素であろう。心理学者のミハイ・チクセントミハイ (Mihaly Csikszentmihalyi) は、能力と挑戦が拮抗した時、あるいは後者がやや上回った時に「フロー」(Flow) という没我状態が生じ、この状態こそが、いろいろな能力の伸長にとって重要となると主張している。すぐにできることばかりではなく、少し考え、工夫し、繰り返して習熟していくというチャレンジの要素を学習計画に取り入れなければ、能力の伸長はあまり望めないというわけだ。もちろん、生徒だけで適切な学習計画を立てるのは困難なので、ここにも教師によるモデル提示などの介入が必要となろう。

また、計画の立案・遂行には、外国語の学習過程全般に対するある程度の知識が必要となる。たとえば、単語の学習は集中学習がよいのか、それとも分散学習がよいのかといったことや、英語スピーキン

グ時にプロソディ(リズム、イントネーションなど)が単音以上に重要な役割を演じること、さらには学習の成果は、投下した時間に正比例して現れるような単純なものではない、といったことなどを知っておれば、計画立案や遂行の際に役立つ。このような知識のことを総称してメタ知識とよび、学習プロセスに関する知識、学習方法に関する知識、タスクに関する知識、学習内容に関する背景知識、さらには学習に関する信念などがこの中に含まれている。

ただ、このようなメタ知識の所有を生徒に期待することは、通常は無い物ねだりとも言えるため、折に触れ教師の側から提供し、計画の立案・遂行に利用させていく必要がある。また、学習に関する誤ったビリーフを持つことは動機の維持、ひいては学習計画の遂行に悪影響を及ぼすため、まずは生徒の持つ英語学習に関するビリーフを書き出させ、誤ったものに関しては実例や経験、科学的データをあげながら修正していくような(信念崩しの活動)機会を持つことも、教師の果たすべき重要な役割と言えよう。

3 振り返り、修正する

ひとたび計画が立ち、それが実行され始めると、そのまま放置しておいても事が成就するかのような幻想にとらわれることがある。しかしこれは、あくまでも幻想にしかすぎず、実際は途中の数か所で評価を行い、問題点を修正していかなければならない。このような評価のことを「形成的評価」(Formative Evaluation)といい、これを生徒自らの手で行っていくことを「振り返り」(Reflection)とよぶ。

ひと口に振り返りといっても、中学生にとっては決して容易な作業ではない。まずは何を振り返らせるのか、その観点をシンプルに提示しておかねば、振り返りは不可能であろう。観点の設定に加え、それがどの程度達成されていれば再学習の必要がないのか、を判定するための判断基準も定めておく必要がある。さらには、振り返りの結果に対して教師が毎回フィードバックを与えることで、その意義や出来栄などを常に意識させ続けることも大切となる。つまり、振り返りを当たり前に行うためには、その全過程において、教師の絶え間ない介入

が必要なのである。

振り返りの結果、目標設定や計画、あるいは学習行動に問題ありとなると、修正の作業に入るわけだが、どのように修正するのかは、学習成功者でも試行錯誤の連続となる。したがって、ここでは教師の指導だけでなく、クラスの友達や先輩たちの経験も含んで修正を考えるような、協働的な方法の導入が望まれる。

4 まとめ

本稿では、*Thinking*の領域について、「目標の設定」、「計画の立案と遂行」、「振り返りと修正」の観点から議論した。この過程で示されたことは、*Thinking*の能力は自然と身につく類のものではなく(ましてや生得的に備わっているものでもなく)、教師をはじめとした他者の介入を受け、そのやり方を徐々に内在化しながら伸ばしていくもの、ということであろう。「自律的な学習者を育てるためにはメタ認知の能力が不可欠」とよく言われるが、この能力を身につけるためには、長い指導の過程が不可避であり、これはとりも直さず、教師の指導上の計画性も問われているということになる。

本連載では、自己調整学習(SRL)という枠組みを基盤にして、英語学習においては目標の設定が重要であること、そして*Doing, Feeling, Thinking*のすべてを取り扱わなければ全体像は見えてこないことなどを議論してきた。この議論は、明日の授業にすぐに役立つというものではないが、授業を計画していく方向性に迷った時などに、必ずや判断の指針となるであろうと筆者は強く信じている。

【参考文献】

- Miura, T. (2011). Motivational trajectories of successful foreign language learners: Six biographical case studies. Ph.D. Dissertation, Temple University.
- 竹内 理 (2007). 「途人の英語学習法—データが語る効果的な外国語学習法とは」東京: 草思社
- Takeuchi, O. (2009). Learning from good language learners in a specific context. In T. Yoshida, et al. (Eds.), *Researching language teaching and learning: An integration of practice and theory* (pp.305-322). Oxford: Peter Lang.